

美という名のエネルギー

vol.5

栗原直弘

(古美術商)

第二章 「美」の認識と発生 ②

本筋と中道具

現在、私が主に扱う江戸から明治の陶芸や漆芸、金工や七宝などは、今でこそ美術品として国際的な評価があるものの、私の父の時代には「中道具」や「貿易物」と呼ばれ、美術品の範疇には入りませんでした。戦前までは、いわゆる「本筋」と呼ばれる、書画と茶道具、仏教美術や刀剣類、一部の鑑賞陶器や西洋骨董以外の物は皆、「アラモノ」や「古道具に毛が生えた物」という扱

いでした。

お陰様で原宿・表参道開業六十年、数多くの外国人と商いをしてきた経験から、彼らの日本美術に対する評価は、そのエキソティシズムばかりではなく、既成概念や予備知識の無い純粹な「美」のエネルギーに対する評価だと考えています。しかしながら、日本国内では、戦後の右肩上がりの経済成長によって、美術品や古美術の需要が高まるとともに、無責任な情報や評論によって無秩序に裾野が広がり、近年では見どころの在る無しに関わらず、あらゆる物が「お宝」や「アンティーク」と呼ばれて

流通するようになりました。

確かに、現在のようには価値観が多様化した時代にあっては、「美」は人の数だけ在るのかもしれませんが。しかし私は、今日の「なんでもあり」の世の中を見るにつけ、「美」の評価ばかりでなく、その価値までもが曖昧になりつつあることに危機感を覚え、「美しい」とは何かを自らに問うためにも、この「美のエネルギー理論」を模索し始めたのです。

宇宙エネルギーと「美」の発生

さまざまな物が「美」として流通する中で、一体何を「美」と呼ぶかを考えれば、それは、私達が何を「美」と認識するかにもよるでしょう。そもそも、人が「美」を認識する以前には、この地球上に「美」は

存在しませんでした。言い換えれば、「美」というものは、人が「美」という概念を理解して初めて存在したのです。

言うまでもなく、そのはるか以前から、第一章でお話した、宇宙の発生に始まる「創造のエネルギー」や自然界の「物質のエネルギー」は存在し、「生体のエネルギー」の作用を含め、すべては悠久の時の流れの中で完全な調和と循環を繰り返してきました。

私は、たとえそれが路傍の石であろうと、宇宙に存在するすべては、宇宙を生み出した根源のエネルギーと同じエネルギーを宿し、それぞれの在り方によってさまざまな周波数の波長を持っていると考えています。そして、私達の「美」の認識とは、それぞれの波長と私達が同調することだと考

えているのです

エネルギーを鑑賞している

「光」の存在を認識するためには「闇」の存在が必要であるように、人が「美」を認識するためにも相対的な判断を必要とします。またそのような比較の対象や判断基準の無い古代に、人が初めて「美」を認識した根本には、生存本能に根差したさまざまなエネルギーとの直接的な感応があったと考えています。

人は、過ごしやすい環境や気候、食物が溢れる森や海の景観、鮮やかな動植物や鉱物の色彩や造形など、自らが好ましいと思うものを、「嬉しい」「楽しい」といった湧き上がる感情とともに、「美」と認識したのではないでしょうか。私は、このような「美」

は、多くの人が瞬間的に「美しい」と感ずる理屈の及ばない世界であり、人の波長と直接同調する周波数帯を有する「美」だと考えています。そして、この論考ではこのような「美」を「天の美」と呼びます。

さらに「美」には、「天の美」のように本能的に認識する「美」ばかりでなく、経験や知識によって理解する「美」や、第三者の刷り込みによって「美」として認知している場合もあり、私は「美」の成り立ちや内包するエネルギーを探ることで、「美」の本質に到達できると考えたのです。

(次号へ)